

第二節 ノロとユタ

ノロとユタは精神世界を担当し、聖なるもので祭事の司祭者として尊崇されていた。仏教やキリスト教のように教義体型を持たない民俗信仰である。

ユタの起源はノロより古いともいわれているがはっきりしない。ノロと前後して奄美諸島には現れたらしいといわれている。

両者の違いは、ノロは琉球王朝が沖縄統一事業に為政者尚氏の手足となつて、その事業を容易ならしめた。したがって王朝の任命により辞令を受け、一族世襲制で女に限られ、祭政一致時代の祭事をつかさどり、一定の報酬を受けその権力も強かった。

ユタは巫病ふひょう（神懸かぶりかりの病気）過程を経て、神から選任された者としてユタになり、男女を問わないが、女性が多く中には巫病を経ないで「モノシリ」として、ユタの役目の一部を受け持っていた人もいたようである。

薩摩が古神道のおいのあるノロを好意的に扱つたためであろう。そのため奄美文化がいつまでも琉球文化への思慕を深からしめる結果を招いたのである。

寛永の初めと、享保年間の禁令などによりノロの勢力は衰え、一方民間信仰のユタが勢力を増し、米穀・酒肴さけを献じ、いけにえとして鶏、やぎ、豚、牛なども献ずるようになり、その弊害も大きくなった。

安政二年（一八五五）藩は代官を通して、厳しい取り締まり令を発し、ユタはもちろん頼んだ者も罰し、徳之島ではユタを遠島にするなどしている。

明治初年の廃仏棄釈によつてノロの祭りやユタが禁止され、シニグ祭も明治三年庚午（一八七〇）を最後に絶えてしまいノロもその姿を消してしまつてゐる。ユタは神と人とを結ぶ役割を持ち、そこに超現実の世界が存在し、奄美の人々の精神生活を支配していた。長い歴史の間には邪教迷信で民衆を惑わすものであるとして官憲によつて弾圧され続けたこともある。

冗費の取り締まりもあつて盆祭りなどの行事も制限され、特にえらぶでは島独特の古い仕来りも消滅してしまつたことは惜しまれる。

王朝の任命でなく俸給を受けないだけに、その数も多く一般に及ぼす影響も大きかった。ことにノロが衰微した薩藩時代にその勢力は増長し、弊害も大きかつたようである。

ユタは生霊死霊の口寄せ（死者の魂を呼び寄せ、己の口を借りてその意を述べること）を行い、時や日や方位の吉凶を占い、人の運命を占い予言もすれば、歴史もそらんじ、病気の治癒も行い、ノロよりも神秘力があつたらしく、その一言一句は神託であるとして權威を持つていた。時や日を占うところから沖縄では「トキ」「トキトリヤ」とも称されていたようであるが、現在では死語になつてゐると聞いている。沖永良部で「トキ」と称していたか、どうかは古老に聞いても明らかでない。

琉球王朝の統一がなされると、ノロはその使命を終わりにさらに島津氏に征服され従属の立場になつた。ノロは政治の面から駆逐されるようになり、さらに儒教が盛んになつて衰退した。

しかし、離島では依然としてノロの権力は強かつた。薩藩が琉球に対し政治経済面では圧迫を加えながら、ノロに対しては寛大であつたのは、島民懐柔と仏教嫌いの

ユタの禁制はその後も続き、大正年間に罰金刑を課した記録もあり、昭和に入つても制限されているが、日常生活の中で人々の心の中に生き続け、その根絶は難しかったようである。

一 ノロ（ノロについては歴史編第四章中世を参照）

二 ユタ

ユタは個人的な悩み、苦しみなどの相談役・呪術者じゆとして、その役割を果たしてきている。

冗費取り締まりなどもあつて、豚や牛を犠牲にして供物にすることはなくなり、薩藩時代からの圧迫に一時は併息ひそくもしたようであるが、昭和初頭の世界の大恐慌による生活苦からの神頼みとして、また大東亜戦争の戦没者靈魂の口寄せなど、ユタはその生命を持ち続けてきている。

(一) ユタの仕事

ユタは神、精霊、死霊などと接触交流し「神降し」を行い、憑霊状態になり、代弁者となって口寄せ、卜占、予言・祈願、加持祈禱などを行うのである。中でも「卜占」はユタの「仕事」の基礎をなすもので、これによって何をなすべきかを決めるのである。

そして、シヨージ、十八夜、二十三夜などの月待ち、祖霊祭などいろいろの指示するのである。シヨージはユタの必修の神祭りであって、シヨージをする女性の選定はユタが行っている。

(二) ユタを入れる

ユタを依頼することを「ユタを入れる」といい、その依頼者は中年以上の女性が多く、自家の予備知識がなければ、卜占の内容に信用がおけるといふことで、自家より遠く離れた他字のユタを頼みがちである。それでも納得できないとか、ユタの指示した内容が時間的、経済的により、ユタの指示どおり実行し得ないときなどは別のユタを頼んでいる。

ユタは先祖祭の唯一の祭祀者であり、フウイキジエ(折節)に依頼される。すなわち家族に死者が出た場合、ミチャミジ(三日忌)、ユーユタまたはマーブイヨセ(七日忌)、四十九日忌、百日忌、ユヌヤヌマチー(二年忌)三年、七年、十三年、十七年、二十五年、三十三年の年忌祭などの供養、フズヌエー(祖霊祭)を年に一度、主として正月に行い、ハミウルシ(神降し)といつて祖霊と語り合う。

また、先祖祭のほかユタを呼ぶ場合は、

- ①ムンゾイ(物の怪のたたり)をほらい、
- ②ムヌアーシ(災いの原因の解明)
- ③夢見が悪いときの占い
- ④ムンニスカタンまたはムンニムタタン(妖怪にかどわかされたりしてさまようこと)その人の方角を判じ、
- ⑤アダジニ(変死)した者は、地の神に引かれ昇天できず、ハジ(風)になつてさまよい、人に風邪をひかせたり、発熱させたりし、また家畜に病気をさせたりする。これはシバナ神といい、たたりがあると恐れられ、シバナトートウをしてほらいをする。

⑥シバナにはウキシバナ(海、船の遭難、島外、旅先で死んだ人の浮かばれない霊魂)とテイシバナ(自宅の畳の上以外で死んだ人の浮かばれない霊)がある。

⑦墓地に穴が開いているなど不吉な前兆があつたり、

⑧墓の移動、改葬などのおほらい

⑨ニービチ(結婚式)、手斧立(起工式)などの日取りを判じ

⑩ミーヤガン(新築願)、アムトウノーシ(カマドの更新)のほらい

⑪家族の息災、旅立ちの安全のグワローヌ(願掛け)

⑫家族や家畜の病気、けがの治療祈禱など

⑬不慮の災害があつた場合

などにユタへの依頼がなされるのである。そのときには親兄弟家族全員が円座する。しかしユタを信じない人はその席を外す場合もある。ことに年忌祭には親類縁者も案内し盛んに行う。ことに三十三年忌は「止め祭り」といって案内客も多く、この日は故人の霊が神の仲間入りをするといわれ、御前風、千鳥節、桜の男児という念仏「ヒヤールガヤッサ」などが踊られ祝福

(三) トロウ方

個人がユタにみてもらうときはユタの家の祭壇の前で行う。ユタの呪術行為はいろいろあるが、依頼者の家で行う場合は、祭壇のしつらえから供物の品を指示する。

祭壇は神棚か床の間に設けられ、ウミチ(御神酒)、洗い米、ナマシ(すのもの)、煮物、マグミミシヨウ(お粥を冷やし発酵させるためモヤシか、生芋を刻んで入れ発酵してから漉したもの)などを供える。ユタは依頼者の家に来るとまず家の周囲を見て回り、その後で白衣をまとい、祭壇の前でみかんがじまるの小枝を叩きながら呪詞を唱え、祖霊を呼び寄せ、次第に身体を震わせ、神懸かり状態になり、まず家人たちの願いや質問を取り次ぎ霊媒を行うのである。

呪詞はユタによつて違ふが、基本的には天照大神を唱えたり、シマダテシンゴ(島の創世神話)シマコーダクニコーダが唱えられる。それはちょうど祝詞風である。

占う形式もさまざまで、次のようなものがある。



10 先祖へのお供え物

そのお膳の縁をトントン叩き、米粒の散り具合を見て占い判じたり、米粒を一つまみ取り、これを二粒ずつに分け一粒残る(奇数個である)と良くないと判断するのである。この動作を何回か繰り返す場合もある。

4 その他

明治時代の例として、「沖永良部島民俗語い」では、「産後何日目かに「マーブイゴメ(霊籠め)」の式があつ

ジなどの指示を与えている。それが済むと、ユタは「ウヤホガナシ ユクワ ユクワ シー オイシヤブントウニ チュラサシータボリアー トートウ トートウ(祖霊様よ、これからよいようにしてあげますから、きれいにしてください あなかしこ)」と祈ると、先ほどの線香がきれいに他の線香とそろって燃えていくのである。

2 米を用いて占う場合

写真10のように膳に小さな米の山をつくるユタもあり、一つの膳に米一升を盛り上げてみるのもあって、ユタによってそれぞれ違っている。

り、このことを「ハナヲミル」とか「クジヲヒク」といっている。これによってエトを当てて霊媒を行うのである。

3 水を用いる場合

アダジニ(異状死者)をした人の霊が昇天できず、人に障るのでユタを頼んだ例として、甲東哲氏撰「沖永良部島民俗語い」の中に、戦後の例として次のような話が載っている。

「昭和二十六年某校で子供が鉄棒から落ちてけがをし、それがもとで亡くなった。ところが他の子供たちが、その子のマーブイ(死霊)がまだそこにいるから怖いと言って鉄棒に近寄ろうとしない。それで亡くなった子の父兄がユタを頼み、霊を墓に帰すための儀式をすることになった。立ち合った人の話によるとユタが呪文を唱えると、彼女の持っている水を入れた湯飲みに、針で突いたぐらいの点が現れ、それが水面で激しく回り始めた。それが死んだ子のマーブイであるとして墓へお供していったそうである。」

- ①杯の酒を見て
- ②湯飲みの水を見て
- ③線香の煙を見て
- ④線香の灰の曲がるのを見て
- ⑤線香数本(五本から十二本)を立て、その燃え具合を見て
- ⑥お膳に盛り上げた米の山を見て(花を見る、くじを引くと言っている)
- ⑦ソロバンによる
- ⑧その他

(四) その処置

呪術の結果、原因の除去、処置として、次のようなことが挙げられている。

- ①祖霊祭祀の不足
- ②月待ち、シヨージの指示
- ③墓石の異変
- ④屋敷内の樹木、石のたたり
- ⑤鶏や豚の犠牲の指示
- ⑥患者の背や腹をなでたり、患部に手を当てる。

- ⑦水を患者に飲ませたり、吹きかけたりする。
 - ⑧その他
- そして、ウワーマガナシ(火、かまどの神)を拝み、イチチマーミ(大豆を黒めにいったもの)か、塩で家の内外をはらい清めてから、宴会に移るのである。

(五) 例を二、三述べてみる

1 線香を用いて占う場合

普通エトの数の十二本立てている。呪詞を唱えるにつれて、だんだん燃えていくが、一本か、二本燃えるのが遅いか、曲がったものが出てくる。そのことを「ヤブリタン」と言っている。ユタはそれを見てエトを言い当てるのである。

死んだ人の霊がエトに出た場合、家人に訴えることがあるとあって、霊の言葉をユタが伝えるのである。

また、列座している家族のエトが出た場合、祖霊からの頼みが伝えられる。

呪詞を唱えている途中から、列座している人の中で、しきりにあくびをするか、吐息をする人が出ると、その人に「ハミヌウリタン(神が降りた)」といって、シヨ

て、ユタは赤子を抱いた母の背や赤子の頭をなでてから

石クジマ 石のひざら貝

金クジマ 金のひざら貝

ナユンタベ のように（腰の曲がるまで長命で）、

息災アラチ 災いのないように

タボーリ して下さい。

などの呪文を唱えてから、ホーホーと息を吹きかけたりする儀礼があった。」と述べている。

前述のように、藩政時代からの弾圧、教育の普及、衛生思想の向上、医療施設の整備などの変化により、ユタの民間療法における役割は失われつつあり、さらに合理化生活への移行に伴う世代交替などもあって信者も減少し、わずかに墓直し、不慮の災害、年忌祭などにその役割を果たしている。

昭和五十七年に筑波大学大学院文化人類学専攻の蛸島直氏の調査したところによると、知名町に七名、和泊町に三名のユタがおり、島外に転出した者もいると報告されている。

ユタは沖縄、大島郡内はもちろん、郡内出身でユタに

なっている人が、東京、阪神、鹿児島方面にもいると聞いている。

※ ユタについては民間療法の項でも述べることにする。